

平成二十九年入学試験問題

注 意

- 一 問題冊子は一冊(14ページ)、解答用紙は二枚、下書き用紙は一枚です。
- 二 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等により解答できない場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 三 すべての解答用紙に、それぞれ二箇所、受験番号を算用数字で記入しなさい。
- 四 解答は、すべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は必ず持ち帰りなさい。

国 語

問題 一

次の文章は、哲学研究者の三浦俊彦が二〇〇五年に執筆したものである。これを読んで後の問に答えなさい。(出題の都合上、本文に省略した箇所がある。)

注一 ラッセルが標的としたヘーゲルの一元論とは、次のような教説である。

「事物が多数存在するというのは、幻想だ。aとbという別個のものがあ、その間にRという関係が成り立っているとす。aは、(bに対し関係Rにある)という属性を持つ。なぜなら、もしその属性を持たなければ、aは現実のaでないだろうか。同様に、bは、(aに対し関係Rにある)という属性を持つ。つまり、どんなものも、他のあらゆるものとの関係を列挙しなければ、それ自身の完全な特徴づけはできないことになる。全体以外のものは、独立して分離するとそれ自身の属性を失ってしまう。よって、個別に分離して存在するように見えるものたちは真の实在ではなく、究極の一者だけが本当の存在である」

この世界観を信奉しているかぎり、「分析」は不可能だろう。なにしろ、あるものを頭の中で個別に考えただけで、それは既に全体との本来の関係から孤立させられており、真実の姿を破壊されているからである。複雑なものを構成要素に区分して、实在の構造と知識の根拠を調べるといった、後年のラッセルの方法は全く使えないことになる。

一元論にとつて必要なのは、関係は属性に還元できる、という前提である。つまり、あるものaが他のものとの間に持つ関係は、すべて、aの内的な属性と同じものだ、という前提である。このような関係をラッセルは「内的関係」と呼ぶ。

内的関係というものはたしかにある。あなたが石につまずけば、あなたは「この石につまずいた」という属性を持つだろう。また、現実にあなたを生んだ母親から生まれた、という属性を、あなたは確かに持つと言うべきだろう。「……につまずく」「……から生まれた」といった関係は、属性に翻訳することができる。それらは内的関係と言ってよい。

しかしたとえば、「富士山より小さい」という属性を、あなたは持つのだろうか。たしかにあなたは、富士山に対して、「より小さい」という関係を持つ。しかしだからといって、「富士山より小さい」という属性が、あなた自身に備わっているのだろうか。

注一 楚荘王は春秋時代、楚国の王。後文に出る齊・晋・秦・宋も春秋時代の国。

注二 箴は前もつて注意を与える。

注三 討軍実は軍隊の兵器や食糧を点検する。

注四 倣は引き締める。

注五 春秋魯文・宣之際は春秋時代の魯国の文公と宣公の治世。

注六 抗顔行は戦争をしかけること。「顔行」は軍隊の最前列。

注七 急迫震懼は焦り心配する。

注八 皇皇はびくびくするさま。

注九 共工之狂は「共工」は神の名。天を支える柱を破壊して天地の姿を激変させた。

注十 辛有之痛は「辛有」は周の臣。周の領土内の伊川の地において礼に反した祭りをする者を見て、深く心を痛めた。

問一 二重傍線部アイウエの適切な書き下しを平仮名で書きなさい。現代仮名遣いを用いてもかまわない。

問二 傍線部(1)を現代語訳しなさい。

問三 傍線部(2)の理由を説明しなさい。

問四 傍線部(3)の「今日之世変」とは今の世の中の変化という意味であるが、著者が、それをどのようなものとして認識しており、どのように対応すべきと考えているのかを七十字以内(句読点を含む)にまとめて答えなさい。

問題 四

次の文章は、清朝末期の政治家、張之洞が書いたものである。これを読んで、後の問に答えなさい。（設問の都合上、訓点を省略した箇所がある。）

昔、楚^{注一}莊王之^ハ覇也、以^テ民^ハ生^ル在^レ勤^ム箴^ニ其^ノ民、以^テ日^ニ討^ニ軍^ヲ實^ニ倣^ニ其^ノ軍、以^テ禍^ニ至^ル無^レ日^ヲ訓^ニ其^ノ國人、夫^レ楚^ハ当^ニ春秋^ノ魯文・宣^ノ之際、土^ノ方^ニ關^ニ兵^ヲ方^ク強、国^ノ勢^ハ方^ク張、齊・晋・秦・宋^ニ無^シ敢^テ抗^ニ顔^ヲ行、誰^カ能^ク禍^レ楚^ニ者、何^レ為^レ而^シ急^ニ迫^ル震^ク懼、如^シ是^ノ皇^皇耶。君子^ハ曰、「不^レ知^ニ其^ノ禍、則^チ辱^ム至^ル矣。知^レ其^ノ禍、則^チ福^ニ至^ル矣。」^③今日^ノ之^レ世^ハ變、豈^ニ特^ク春秋^ノ所^レ未^ダ有^ラ。抑^モ秦・漢^ニ以^テ至^ル元・明^ニ、所^レ未^ダ有^ラ也。語^ニ其^ノ禍、則^チ共^ニ工^ノ之^レ狂、辛^ニ有^ラ之^レ痛、不^レ足^レ喻^レ也。

（清・張之洞『勸学篇』序による）

バートランド・ラッセルは、二〇〇五年二月二日現在、三浦俊彦によって思い描かれているという属性を持つのだろうか。たしかにラッセルは、三浦に対して、二〇〇五年二月二日現在、思い描かれる」という関係を持っている。しかしだからといって、二〇〇五年二月二日現在、三浦俊彦によって思い描かれる」という属性が、ラッセル自身に備わっていたのだろうか。自分が死んだ三十五年も後に、会ったこともない極東の外国人の心に勝手に生じる状態が、ラッセル自身「属性」と言えるのだろうか。

属性には還元できない関係をラッセルは「外的関係」と呼ぶ。外的関係は、内的関係とは異なり、当の対象にとって本質的でないような関係である。内的関係と外的関係の区別は曖昧で、特定の関係がどちらなのかは、直観的に判別するしかないが、いずれにせよヘーゲル主義的一元論は、「すべての関係は内的関係である」と主張している。それをラッセルは「内的関係の公理」と呼び、この公理を否定する論証をいくつか提示した。この公理を否定するには反例を一つでも挙げれば十分だろう。あるいは、反例を挙げずに、いかに関係を属性に還元できたとしても必ず別の関係が残る、という一般的な論証で応ずることもできる。ラッセルは、両方の種類の反論を試みた。

まず、反例を挙げるほうの議論。ラッセルは、因果関係を含まない非対称的関係を反例とする。非対称的関係とは、「より大きい」「より先である」のような、一方には成り立つが逆方向には成り立たない関係だ。たとえば、ソクラテスはラッセルより先に生まれた。内的関係の公理によると、ソクラテスは「ラッセルより先に生まれた」という属性Aを持ち、ラッセルは「ソクラテスより後に生まれた」という属性Bを持つ。関係が属性に本当に還元されたのであれば、属性AとBは、関係性を含んでいないはずである。つまり、基本的な日付などによって表わされているはずである。

しかしそれでもなお、属性AとBのどちらが先か、つまりどちらが先に例示されたのか、という疑問がまだ成り立ちうるだろう（属性が例示されるとは、その属性を持つ存在者が生ずること）。すると、「より先である」という関係がまだ残っていることになる。そこで、属性Aは「属性Bに先立つ」という属性Cを持ち、属性Bは「属性Aに先立たれる」という属性Dを持つのだ、というふうにして、属性AとBとの間の「先立つ」を属性に還元するでしょう。しかしその場合もまた、属性CとDとはどちらが先なのか、という問いが残ってしまう。以下同様にして、関係はいつまでたっても消去できないのである。

右の論証は、『数学の諸原理』(一九〇三)でいろいろなバリエーションで提示された。数学では、大小関係や包含関係など、非対称的關係が重要な役割を演ずる。数学にとって関係そのものが不可欠であることを示すのは、ラッセルにとって重要だったのである。

次に、一般的な論証。こちらは、『ライプニッツの哲学』(一九〇〇)で試みられた論証である。あるものaが属性Fを持つとき、aがFを持たないのではなく持つとはどういうことなのか、と問うてみよう。aとFとの関係はどういうものか、と。関係をいくら属性に還元しても、属性の持ち主と属性との関係が残ってしまうので、完全な還元は不可能ということになる。そこで、属性の持ち主と属性とは別のものではなく、同一なのだ、という抜け道が思いつかれる。実際、すべては一者だとする一元論にはこの弁明はふさわしい。

しかし属性の持ち主と属性が同じというのは、あるものaはそれが持つとされる諸々の属性すべてと同一だということだが、そのとき、同じaに属するそれら属性どうしの関係はどのようなものだろうか。aが属性FとGを持ち、Hを持たないというとき、FとGが共有してHは共有しない何事かがあると云わざるをえないが、それこそは「ともにaと同一である」という同一性関係(共属関係)であろう。しかしこれでは、Fがaに属するという属性性が、共属という関係性によって基礎づけられることになる。関係は属性に還元されるという一元論の趣旨とは反対のことが正しくなってしまうのだ。

こうしてさまざまな側面から一元論を攻撃することで、ラッセルはイギリス哲学に多元論的経験主義を回復した。「関係は実在する」「世界には多数のものがある」という信念を抱くことができるようになったラッセルは、このときの転向を「とても充実した宇宙が与えられた」と喜びをもって述懐している。とくに「関係は実在する」というテーゼは、「関係」「属性」といった「普遍者」の実在を主張するラッセルの反唯名論注四のスローガンとなり続けた。

(三浦俊彦『ラッセルのパラドクス―世界を読み換える哲学―』による)

注一 御下りの折に宗尊親王が將軍として京都より鎌倉に下向したとき。

注二 院にも、東の開こえを「院」は宗尊親王の父である後嵯峨院。「東」は鎌倉幕府を指す。

注三 御使ひに下されて後嵯峨院が鎌倉幕府へ経任を使者として遣わして。経任はこの後、権大納言まで昇進するが、使者となったときはまだ低い身分(下臈)だった。

注四 土御門殿、承明門院の御あとに土御門殿は承明門院(宗尊の曾祖母)が昔、住んでいた邸。

注五 右近の馬場にこの近くに北野天神が鎮座する。北野天神は無実の罪で大宰府に流された菅原道真が神として祭られる。
注六 言ひなしけるとかや「噂」をしたとかいう話だ。

問一 傍線部アエカを、主語などを補って現代語訳しなさい。

問二 傍線部イオを現代語訳しなさい。

問三 傍線部ウの和歌の「虎」と「ねずみ」はそれぞれ何をたとえているのか、わかりやすく説明しなさい。

問四 『増鏡』はなぜ宗尊親王に謀反の疑いがかけられたと考えているのか、わかりやすく説明しなさい。

次の文章は、文永三年（一二六六）七月八日、鎌倉幕府の将軍であった宗尊親王（宮）が、幕府の執権である北条氏に対する謀反の疑いをかけられて將軍職を追われ、京へ戻って六波羅に滞在する場面から始まる。これを読んで、後の問に答えなさい。

文永三年七月八日、上らせたまひぬ。御下りの折、六波羅に建てたりし檜皮屋、一つあり。そこにぞはじめは渡らせたまふ。

いとしめやかに、ひきかへたる御有様を、年月の習ひに、さうさうしうもの心ぼそう思されけるにや、

虎とのみ用ゐられしは昔にて今はねずみのあな憂世の中

院にも、東の聞こえをつつませたまひて、やがては御対面もなく、いと心苦しく思ひきこえさせたまひけり。経任の大納言、

いまだ下薦なりしほど、御使ひに下されて、何事にか、仰せられなどして後ぞ、苦しからぬことになりて、宮も土御門殿、承

明門院の御あとへ入らせたまひける。院へも常に御参りなどありて、人々も仕うまつる。御遊びなどもしたまふ。

雪のいみじう降りたる朝あけに、右近の馬場のかた、御覽じにおはして、御心のうちに、

なほ頼む北野の雪の朝ぼらけ跡なきことにつづもるる身も

世を乱らむなど思ひよりける武士の、この御子の御歌すぐれてよませたまふに、夜昼、いとむつましく仕うまつりけるほど

に、おのづから同じ心なる者など多くなりて、宮の御気色あるやうに言ひなしかるとかや。さやうのことどもの響きにより、か

くおはしますを、思し嘆きたまふなるにこそ。

『増鏡』(2)

注一 ラッセルIIイギリスの論理学者、哲学者、数学者。

注二 ヘーゲルIIドイツの哲学者。

注三 公理II数学・論理学で自明な真理として認められ、他の命題の前提となる根本命題。

注四 反唯名論II個物のみが存在し、普遍は個物をさす名にすぎないとする考え方を否定し、普遍の実在性を主張する立場。

問一 傍線部(1)の「内的関係」とは何か。「外的関係」との違いをふまえて簡潔に説明しなさい。

問二 傍線部(2)の「自分が死んだ三十五年も後に、会ったこともない極東の外国人の心に勝手に生じる」は、一種の強調表現と考
えられる。どういうことを強調したものかを説明しなさい。

問三 傍線部(3)の「別の関係」とはどのような関係か。それを具体的に示した部分を本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

問四 本文で紹介されているラッセルによる「内的関係の公理」を否定する議論のうち、反例を挙げるほうの議論の骨子を七十字
以内(句読点を含む)でまとめなさい。ただし、「属性」「関係」「還元」という言葉を用いること。

次の文章は小川洋子の「失踪者たちの王国」の一部分である。よく読んで、後の問に答えなさい。

① 生まれて初めて失踪という言葉の意味を知ったのは、九歳の時だった。教えてくれたのは近所に住む絨毯屋の娘だった。

「叔父さんがねえ、^{注一}タクラマカン砂漠へ小羊の買い付けに行っただけ、帰ってこないの。失踪しちゃったのよ」

彼女の口振りが気取っているうえに、自慢げでもあったので、私は絨毯屋一家に訪れた事態をそう深刻には受け止めなかった。むしろややこしいカタカナの砂漠の名前は、ロマンティックな想像さえ呼び起こした。

「その、何とか砂漠って、どこにあるの？」

私は尋ねた。

「中国のずっとずっと奥、もうすぐそこがアフガニスタンっていうくらい奥地」

私たちは同い年だったが、彼女は心臓に穴が開く病気を患って、学校には行っていないかった。病院以外ほとんど外出することなく、家に閉じこもりつきりなのに、世の中のことに驚くほど物知りだった。

難しい言葉を次々繰り出し、「それ、どういう意味？」と私が質問するまで決して余計な説明はせず、しかしひとたびこちらが降参すれば、世話の焼ける人ねという顔で、更に新しい知識を^アヒロウするのだった。

「叔父さんは羊を買って、どうするつもりだったの？」

「ばかね。もちろん絨毯にするんじゃない。ただの羊じゃないのよ。高地に住んでいる、しかも子供の羊の胸から脇腹にかけての毛、それではないと駄目。脂を含んで柔らかくて、艶があるから。うちにあるのは全部、最高級の絨毯なのよ」

「でも、砂漠に羊なんて住んでいるのかしら」

「まず一番に、どうして失踪したのか聞くのが普通じゃない？」

注一 タクラマカン砂漠⇨中央アジアのタリム盆地の大部分を占める砂漠。

注二 ヒヒ⇨主にアフリカに分布するサルのこと。

注三 マントルピース⇨居間やホールの壁につくりつけられた暖炉のまわりに行う装飾。のちにはそのような飾りをもつ暖炉全体をさすようになった。

注四 ハプスブルク家⇨神聖ローマ帝国およびオーストリアの王家。

問一 傍線部アイエオのカタカナ部分を漢字に直しなさい。

問二 本文中に傍線部(1)とほぼ同じ意味の文がある。その最初の五文字を書きなさい。

問三 傍線部(2)では、彼女のどのような気持ちが表されているか。なぜ、そのような気持ちになったのかも考えて書きなさい。

問四 傍線部(3)の表現上の特徴を述べ、この表現によってどのようなことが表されているか、書きなさい。

問五 傍線部(4)はなぜそう思うのか、理由を述べなさい。

問六 なぜ「私」は傍線部(5)のように思ったのか、文章全体をふまえて具体的に述べなさい。

彼は私に入歯を見せてくれた。それはブロンズの置時計やシャンパングラスや銀製の果物入れと一緒に、応接間のマントルピースの上に飾ってあった。

歯茎はまだ唾液でシメついているかのような鮮やかな赤みを帯び、行儀よく並んだ歯は不透明に白く、金属の留め金は光を受けて輝いていた。

もっとよく見えるよう、彼はそれを左手に載せた。肉のたつぷりついた彼の手は、入歯を受け止めるのに丁度いい台座となつた。

私はそれが納まつていたはずの、おじいさんの口の中について考えた。おじいさんが迷い込んだのは、そこに広がる薄暗い空洞ではないだろうかという気がした。

中学校の保健室の先生の場合は、婚約者だった。二人でウィーンを旅行中、恋人は突然いなくなつてしまった。シユテファン大聖堂の地下にある墓地を見学してホテルへ戻ると、墓地の事務所から電話が掛かつてきた。手帳を拾つて預かっているから、取りに來いという話だった。

「ちよつと行つてくるよ」

パスポートも持たず恋人は出掛けて行つた。それが最後だった。

「あとで荷物を調べたら、手帳はちゃんとあつたの。落としてなんかいなかったの。墓地からの電話も、偽物だったわ」

保健室のベッドの枕元で、先生は静かに語つてくれた。ハプスブルク家の棺の模様や、ペストで死んだ人々の山積みされた骨や、遠くに響く大聖堂の鐘について、いつまでも語り続けた。熱のある耳に、それは清らかなお伽話のように聞こえた。

みんな不意に、理由なくきつぱりと行方をくらました。それが失踪者にとって一番大事な条件のようだった。そして残された人々はそつと私のそばに近寄つて、耳元で失踪の物語を語り、すべてを言い尽くしてしまうともう心残りはないというふうに、私の感想など聞かないまま遠ざかつていった。

(小川洋子「失踪者たちの王国」による)

(2) 彼女は丸めて壁に立て掛けてある絨毯の裏地を指で弾いた。天窓から差し込む細い光の中を、埃が舞い上がった。

自分のした質問のどこが失礼にあつたのか見当がつかないまま、私はどきまぎと謝つた。本当は、しつそつの意味がよく分からなかったのだ。

そこは店の裏手にある蔵で、絨毯がびつしり保管してあつた。毛足の長い、房飾りがついたので、幾何学模様の、染みがついたの、とにかくあらゆる種類の絨毯が揃つていた。天井の隅には蜘蛛の巣が張り、床は気味の悪い音を立てて軋み、息が詰まるほどに埃つぽかった。

「お父さんが探しに行つたんだけど、手掛かりは見つからなかったみたい。何せ、タクラマカン砂漠だものね」

彼女はため息をついた。機嫌をソコねないよう、注意深く私もうなずいた。

本当は蔵に入るのは大人たちから禁止されていたのだが、私たちはしばしばそこで密会した。大人たちはひんやりと淀んだ空気が、心臓によくないと心配したのかもしれない。しかしその薄暗い光の様子は、他のどんな場所よりも彼女に似合つていた。

穴の開いた心臓のせいで彼女の肌はオブラートの⁽³⁾のように透き通り、不用意に濡れた指で触れると溶けてしまいそうだった。身長は六つくらいの幼児ほどの大きさしかないのに、目元や額や頬骨にはロウレンな様子さえ漂い、そのアンバランスさが身体の隅々に集つていた。

けれど何より特別なのは唇だった。そんな難しい言葉を発音できるとは信じられないほどに小さく、つるつるとして、薄い紫色をしていた。その唇が蔵の光の中で動くのを見るのが、私は好きだった。

「叔父さんはいつも上等な毛を仕入れていたわ。小羊を探して世界中を旅していたの。一瞬のうちにいい絨毯になれるかなれないか、見抜けたのよ。羊の胸を一撫でするだけだね。たくましくて優しい叔父さんだった。もちろん、私だって悲しいわ」
彼女は両手で抱えた膝の上に顎をのせた。その角度の方がより近くに唇が見えた。

「でもね、あなただけに正直に言うけど、心のどこかではほつとしてほつとしているの。軽蔑しないでね」

「ええ、もちろん」

(4) 唇の角度が動きませんようにと、私は祈った。

「これでもう、気色の悪い薬を飲まなくてすむと思うと、せいせいした気分よ」

心臓にいいと言われるアヤシげな薬を、叔父さんが旅先から大量に送ってきているのは私も知っていた。木の実、根、樹皮、茸きのこの類たぐいから、蠟ろうの油漬あぶらけ、イルカの寧丸とうがん、ヒヒの胎盤注二まで、さまざまな形態と匂においを持った薬たちだった。彼女は飲んだ振りだけして、それらをよく蔵の床下に捨てていた。サイの角を煎せんじた液は床板のすき間から流し、干涸ひからびた海豹あざらしの眼球は節穴に押し込めた。

「いなくなる前の日、叔父さんは小羊の毛を十五匹手に入れて、上機嫌だったそうよ。全部自分でさばいて、血が乾いたらそれを持って帰国するはずだったの。ところが、別の遊牧民のグループで優秀な羊が生まれたっていう情報が入って、欲が出たのね」

彼女は背中を丸めて少し咳せき込んだ。絨毯は獣の匂においがして、私でも長く蔵にいと胸が苦しくなるようだった。けれどそれは、捨てられた薬の匂においだったかもしれない。

「ここにある絨毯は全部、叔父さんが殺した小羊でできているの。叔父さんは毛皮をはぐ名人だった。毛だけを刈るんじゃない、皮かわごとが、ぐのが叔父さんのやり方なの。その方が毛を瑞々みずみずしく保つことができるから。苦痛なんて与えないのよ。羊の方は自分が何をされたのか気づきもしないうちに、丸裸にされてるっていう訳。あれっ、と思った時にはもうあの世なの。額かぶにナイフを振り下ろして、一気に背中を切り裂く。大事な胸と脇腹を傷つけないように注意しながら、でも大胆に、メシツ、メシツとはいでゆくのよ」

薄紫色の唇はよく動いた。太陽が傾いて光の角度も変わってきた。背丈より大きい絨毯の束が、いくつもいくつも重なり合って私たちを閉じ込めていた。

「叔父さんは新しい小羊の毛皮をはぐために、タクラマカン砂漠へ足を踏み入れていったの。地平線目指して、地図も持たず、振り向きもせず、ただナイフだけを腰に突き差して。で、そのまま消えちゃった。小羊たちを置き去りにしてね」

これが私の、失踪者との最初の出会いだった。

一体世の中には、何人くらい失踪する人がいるのだろう。失踪者を身内に持つ人と友だちになったり、あるいは自分の知り合いが失踪したりするということは、人生にどれくらいの割合で現われるものなのだろう。

もしかしたら自分は、特別に選ばれた人間なのかもしれないと思うことがある。⁵⁾失踪者たちのためにある役割を果たすよう、神様に任じられた人間ではないかと。

振り返ってみれば、いつの時代にも私の隣には失踪者の影があった。ある時は控えめにひっそりと、ある時はこちらを覆い隠すほどの勢いで、私に寄り添っていた。影が消えることは一度もなかった。何かの拍子に遠ざかる瞬間はあっても、ふと気が付けばまた失踪者の手が、私の肩先を撫でているのだった。

絨毯屋の娘の次に出会ったのは、六年生の時席が隣同士だった、肥満児で左利きの少年だった。彼は祖父を失っていた。

おじいさんはある日歯医者に行ったとき、帰ってこなかった。診察台の上に横たわり、入歯を外してそれをサイドテーブルのトレーにのせ、順番が来るのを待っていた。どこにも変わったところはなかったと、歯科医院の人たちは証言した。

予約通りの時間に現われ、受付けの人と二言三言天気の話をし、待合室のソファで釣りの雑誌を読んだ。普段着にサンダル履きで、どこか遠くへ行くための荷物を抱えている訳でもなかった。

「あっ、ちょっと失礼します」

何か不意に思い出したように、おじいさんは言った。入歯を外していたので発音ははっきりしなかったけれど、決して深刻な様子ではなかったらしい。

首から前掛けを取り、スリッパをパタパタいわせながら診察室を出ていった。それきり二度とおじいさんは姿を現わさなかった。後には入歯だけが残された。

「最新の材料で特別にあつらえた品なんだ」